

『道徳感情論』における 国家権力の問題

天 羽 康 夫

は じ め に

わたくしは、まえに、「『道徳感情論』における政治と経済」という小論¹⁾において、アダム・スミスの政治思想を検討した。しかしそこでは、政治と経済という視角を設定していたために、道徳の問題が欠落していた。スミスの道徳の世界は、政治思想ときわめて関連ぶかい正義をふくんでいる。この正義の検討を欠いていたために、その小論の解釈には、一方的なところがあった。さらにその小論の考察対象は、『道徳感情論』第6版であった。スミス生前の最終版であるこの版には、かなりの加筆修正がある。

本稿の課題は、以上の欠陥を克服しつつ、スミスの国家権力論を再検討することである。したがって以下では、正義論およびスミス政治思想の展開の検討が主たる課題となる。スミスの政治思想の展開をおうためには、『道徳感情論』初版と第6版のあいだにある『国富論』、とくにその第5篇、および、18世紀後半の政治情勢が重要となるであろう。しかしこの小論では、そこまで言及しえない。以下では、『道徳感情論』における変化に焦点をしぼり、国富論との関係の検討は、のちの課題としたい。

I

『道徳感情論』における国家権力の問題を考えるばあい、主要な考察対

1) 拙稿「『道徳感情論』における政治と経済」『経済科学』18巻3号1971年

象になるのは、いうまでもなく正義論（『道徳感情論』第2部「値うちと欠陥について、あるいは報償と処罰の対象について」）である。正義の徳は、力づくで強制されるという点で、道徳の世界において特異な存在であった。しかしそれは、ひとつの徳性として、スミス道徳論の一般的性格を反映せざるをえない。したがって正義論を正しく理解するためには、まず、正義の徳をふくめたスミス道徳論を検討しなければならない。

スミスは、道徳の問題はふたつの角度から考察しなければならないと主張する。「なにかの行為がそれからでてきて、またその行為の徳と悪徳の全体が究極的にそれに依存するにちがいない、心の感情または意向は、ふたつのちがった角度から、すなわちふたつのちがった関連において、考察されうる。第1には、それをかきたてる原因、あるいはそれを生じさせる諸動機との関連において、第2には、それが目ざす目的、あるいはそれが生みだすようになる効果との関連においてである。」²⁾ 第1の視角から、感情の帰結としての行為の適宜性 (propriety) または不適宜性があきらかになる。それらは、感情がその原因にたいしてもつ適合性または不適合性に依存する。第2の視角が問題とするのは、その行為を報償とか処罰にあたいるものとする諸性質、すなわち行為の値うちと欠陥である。正義は、この第2の視角から説明される。

スミスのこの考察方法について、ふたつのことに留意しなければならない。第1に、道徳性が感情に帰せしめられていることである。『道徳感情の理論』というタイトルが示すごとく、まず感情が対象とされているのである。ではスミスにおいて、行為ないし行為の結果の道徳性はどうなるのか。それらとそれらを生みだした感情とのあいだにズレはないのか。のち

2) Adam Smith, *The theory of moral sentiments*, London 1759. p. 27. 水田洋訳『道徳感情論』1973年、22ページ。以下において『道徳感情論』は *T. M. S.* と略す。本稿では初版以外に第6版を問題とするが、そのばあいには、*T. M. S.* 6th ed. として示す。ただし、第6版そのものは、利用しえなかったのでページ数は、1969年 Arlington House からだされたボーン版の復刻版のページ数を示す。

に見るようにスミスは、こうした問題にも関心を示し、興味ぶかい叙述を展開している。注意すべき第2の点は、かれが感情を、その原因との関連において検討しようとした点である。これは画期的なことであった。

近年の哲学者たちは、感情を第2の視角からしか考察しなかった³⁾。感情をその目的、効果のみから見るならば、道徳性は、利己的とか利他的とかいった感情の種類いかににかかわることになる。ある種の感情は、道徳の世界から排除されるであろう。スミスが感情をその原因との関連でとうという第1の視角を設定したのは、こうした従来の哲学を克服するためであった。この視角を設定することによって、現実の人間がもつさまざまな感情をまずみとめたうえで、それらの社会的妥当性を検討してゆく道がひらかれたのである。こうして、従来、道徳の世界から排除されがちであった。利己的諸情念はいうまでもなく、非社会的諸情念（憤慨）⁴⁾ さえも、ていどいかにによってはみとめられるようになった。そもそも自然は人間に、いかなる意味でも是認されえない原理など与えていない。「自然は、人類の現在の墮落した状態においてさえ、完全にかつあらゆる点で害悪的な原理、あるいは、どんなていどでもどんな方向においても称賛と是認との正当な対象でありえない原理を、なにかわれわれに授けておいたというほど、不親切にとりあつかったとは思われない。」⁵⁾ さらに日常生活の実際からも、このことは証明される。人びとは、どんな種類の、またどんなていどの感情であれその原因に均衡しているならば、是認しているのである⁶⁾。

こうした視角から展開されたスミスの道徳の世界において、徳性は多様

3) 「近年の哲学者たちは、主として諸意向の傾向を考察してきたのであって、それらが、それらをひきおこす原因にたいしてもつ関係については、ほとんど注意をはらわなかった」。T. M. S. p. 27. 水田訳, 22ページ。

4) のちにみるようにスミスが正義を理性からでなく、感情からとくことができたのは、このためであった。

5) T. M. S. 167p. 水田訳, 119ページ。

6) 「ふつうの生活においては、どんな人物であってもその行動について、そしてそ

化せざるをえない。適宜性は、あらゆる感情において成立するからである。もっともスミスは、徳性とたんなる適宜性とはことなるという。「徳性とたんなる適宜性とのあいだ、感嘆され祝福されるにあたいする諸資質、諸行為と、是認されるにあたいするだけの諸資質、諸行為とのあいだには、重要なちがいがある。……反対に、もっとも完全な適宜性におよばない諸行為にも、かなりのていどの徳性が、しばしばありうる。」⁷⁾しかし、この部分でのべられているのは、状況のちがいによって適宜性を達成する難易度にちがいがあり、それが容易に達成されるばあいには、とりたてていうほどの徳性がなく、困難なばあいには、完全な適宜性に到達しなくともかなりの徳性があるということである。したがってここでも徳性の究極的な根拠は適宜性におかれているのであるから、適宜性の優位には変りはない。問題は、徳性を、到達しがたい適宜性に到達するすぐれた諸資質に限定していることである。しかし、この限定は、厳密にまもられていないし、また、適宜性に到達するのにすぐれた諸資質が要求されるような局面は、多くない。多くのばあい完全な適宜性をまもるのに、ごくふつうの人間のもつ自己規制で十分なのである。⁸⁾

諸感情の適宜性を検討するものとして多様化せざるをえないスミス道徳論を、原理的に統一しているのが、有名な同感の原理である。「主要当事者の本源的諸情念が、観察者の同感的諸情動と完全に協和しているばあいは、それらの情念は必然的に、この観察者にとって、正当、適当であり、

れを導いた諸感情について、われわれが判断するときに、われわれはつねにそれを、これらの双方の角度から考察する。……われわれは、かれらの情動のはげしさについて、その原因が、なにかの点で、それに均衡していたならば、おそらく許したであろうし、是認したであろう」。T. M. S. pp. 27-28. 水田訳, 22-23ページ。

7) T. M. S. pp. 45-46. 水田訳, 33ページ。

8) 「多くのばあいに、もっとも完全な適宜性をもって行為するには、人類のうちのもっとも無価値なものでさえ所有する、ふつうで通常のていどの感受性または自己規制以上のものは、必要ではない。」T. M. S. p. 45. 水田訳, 33ページ。なお、適宜性と徳性との関係にかんしては、水田洋「市民社会の道徳哲学」『社会思想』3巻1号, 1973年をも参照せよ。

情念の対象に適合したものと、思われるのである。そして、反対に、事情をかれ自身のものとして考えたばあいに、それらの情念がかれが感じるところと一致しないことを、かれが見出すならば、それらは必然的に、かれにとっては、不当、不適當であり、それらをかきたてた諸原因に適合しないものと、思われるのである。したがって、他人の諸情念を、その諸情念の対象にとって適合的なものとして是認することは、われわれがそれらに完全に同感するとのべるのと、おなじであり、そして、それらをそういうものとして是認しないことは、われわれはそれらに完全には同感しないと、のべるのとおなじである。』⁹⁾

この同感の原理についてはながい研究史があるが、最近になって、水田氏によって画期的な解釈が提示された¹⁰⁾。従来の解釈は、観察者の当事者についていこうとする努力を強調しすぎた。しかし同感するもの＝観察者だけでは、社会は成立しない。また、当事者感情にできるかぎりついていこうとする観察者の同感は、当事者感情にひろく社会的是認をあたえない。スミスにおいて重視されていたのは、そのような観察者の同感ではなく、街頭でであう見しらぬ人びとの同感であった。かれらは、当事者にちかい家族や友人のように、当事者についていく努力はしないが、そのためにかえって中立的な見方をする。この中立的な (impartial) 観察者の同感が、当事者感情の社会的妥当性を保証するのである。そこで当事者としては、社会的妥当性をえるためには、自己の感情を冷却しなければならない。すなわちスミスにおいては、観察者の優位と当事者の自己規制が強調されているのである。

したがってスミスの道德の世界においては、宗教的権威とか政治的権威による規制といった意味での道德の超越的性格は、きわめてよわくなる。

9) T. M. S. p. 22. 水田訳, 19ページ。

10) 水田洋前掲論文, および同「アダム・スミスにおける同感概念の成立」『一橋論叢』60巻6号(1968年), 同「18世紀思想とアダム・スミス」大河内一男編『国富論研究』2巻, 1972年。以下の叙述においては、これら3論文を参照した。

重視されるのは、日常生活における人びとのまじわりをつうじての規制である。このことと並行して、道徳の一部としてのスミスの正義において、その権力主義的性格は、きわめてよくなる。

正義は慈恵とともに、本節の冒頭で見たふたつの視角のうち、第2の視角、すなわち感情がめざす目的あるいは生みだす効果との関連で検討される徳性である。正義論で問題になる感情は、憤慨である。処罰にかんしてつぎのようにいわれる。「きわめて即座に直接にわれわれを促して、他人を処罰したり、他人に害悪を課したりさせる、あの感情の正当では認められた対象であるように見える行為が、処罰にあたいするように見えるにちがいない。……きわめて即座に直接に、われわれを促して処罰させる感情は、憤慨である。」¹¹⁾ところで、正当では認められる憤慨とは、中立的な観察者の同感がえられる適宜性をたもった憤慨にほかならない。したがって第2の視角から問題にされる正義論にも、第1の視角がもちこまれることになり、両者の実質的区別はなくなっている。問題は、観察者の同感をえられる憤慨ということに帰着する。

そこで正義の諸法の目的は、つぎのようにみちびきだされる。「なされる害悪が、大きくそして回復しえないものであればあるだけ、受難者たちの憤慨がとうぜんに高まるように、観察者の同感的な義憤も、行為者の罪悪感とともに、同じく高まる。死は、ある人が他の人に与える最大の害悪であり、殺された人に直接に関係がある人びとの、最高度の憤慨をかきたてる。したがって、謀殺は、人類の目から見ても、それを犯した人の目から見てもともに、諸個人だけに作用するすべての犯罪のなかで、もっともひどいものである。われわれが所有しているものを剝奪されることは、われわれが期待をもっているにすぎないものについて失望させられるよりも、大きな害悪である。だから、所有権の蹂躪は……契約の蹂躪よりも大

11) T. M. S. p. 143. 水田訳, 104-105ページ。

きな犯罪であって、後者は、われわれが期待していたものについて、われわれを失望させるにすぎない。それゆえに、もっとも神聖な正義の諸法は、……われわれの隣人の生命身体を守る諸法である。つぎは、かれの所有権と所有物を守る諸法であり、すべてのあとにくるのが、かれの個人権とよばれるもの、すなわち他の人びととの約束によってかれに帰属するものを、守る諸法である。』¹²⁾

こうして、生命、財産、契約を守ることを目的とする市民社会の法体系が基礎づけられたわけであるが、ここで憤慨の対象として問題になっているのは、感情よりも、行為およびその諸結果である。しかし、スミス道徳論において問題となっていたのは、冒頭で見たように感情の世界でなかったか。たまたまでてきた諸結果にたいして、加害者はどうして責任をとらねばならないのか。

スミスはまず、かれが責任を負うべき諸帰結は、かれの意図した諸帰結のみであるという。身体の外的な運動そのものは、鳥をうつ人と人間をうつ人において相違はない。行為の諸帰結は、「行為者にではなくて、偶然性に依存するものである。』¹³⁾したがって、身体の外的な運動としての行為ならびにその諸帰結は、称賛または非難の対象となりえない。しかしこの公正な原則は、抽象的に考察されるばあいには誰にもうたがわれないが、個別的事例においては、めったに守られていない。現実には、意図でなく結果によって判断されるのである。結果をともなわなかった意図の責任は、反逆といった重罪のばあい以外にはとられない。逆に結果がともなうばあいには重過失はいうまでもなく偶発事件のようなものでもその責任はとられる¹⁴⁾。

スミスは、こうした事態を感情の不規則性という。かといって、それを

12) *T. M. S.* pp. 183-184. 水田訳, 131-132ページ。

13) *T. M. S.* p. 208. 水田訳, 146-147ページ。

14) Cf. *T. M. S.* pt. II. sect. 3. chap. 2.

批判するわけではない。人類をこのようにつくったところにも、人類の幸福をねがう自然の意図があらわれているのである。「もし、企図の有害性、意向の悪意性だけが、われわれの憤慨をかきたてる諸原因であるならば、そういう諸企図あるいは諸意向を胸に宿していると、われわれが疑いあるいは信じた人物にたいして、われわれはその情念のあらゆる狂暴さを、感じるはずであり、それらがけっしてなにかの行為となってあらわれなかったとしても、そうなのである。……（そして）あらゆる司法上の法廷は、真の異端糾問となるであろう。」¹⁵⁾感情の不規則性は、このような事態をさけるために、自然の創造者によって、人間のうちにうえつけられているのである。では、善意がありながら良い結果を生みだしえなかった人、また悪意がなくとも悪い結果を生むにいたった人は、どうなるのか。かれは人間的司法権をこえた心についての偉大な裁判官によってさばかれるのである¹⁶⁾。すなわちスミスは、偶然性に依存する行為の諸結果にたいしても責任をとられる現実を、宗教によって聖化しようとしているのだ。

以上でみた正義論は、特別あたらしいものではない。生命、財産、契約を守る市民社会の法体系は、すでに、ロックによってのべられていたことである。また、結果責任の世界にしても、ホッブズがすでにのべていたことである¹⁷⁾。その意義は、受難者の憤慨とそれにたいする観察者の同感という方法で、正義の諸法の内容を示したことにある。この方法によって、正義論は民主化された。国家権力の側から、社会の存続にとっての必要性という観点で正義をとく全体主義的な正義論は、克服された。このような

15) 16) T. M. S. pp. 238-240. 水田訳, 166ページ。

17) ロックについては、説明する必要はないであろう。結果責任についてホッブズはつぎのようにいう。「盗んだり殺したりしようと意図することは、それが決して言葉や事実にあられなくとも罪悪である。というのは、神は、人が意図することをみていて、それを、その人の責任に帰しうるからである。だがそれは、人間の裁判官が、その意図を明らかにしうるような、なにかなされたりいわれたりしたことによってあらわれるまでは、犯罪とは称されないのである。」Thomas Hobbes. *Leviathan*, ed. with intro. by C. B. Macpherson, Pelican Classics p. 336. 水田洋訳, 『リヴィアサン』河出書房, 192ページ。

正義論にたいするスミスの批判はきびしい。

「社会は、正義の諸法がかなりよく守られなければ、存立しえず、どんな社会的交際も、相互に侵害することを普遍的に放棄していない人びとのあいだでなければ、発生しえないのであるから、この必要についての考慮が、正義の諸法を侵犯する人びとへの処罰によって、それらを強制することを、われわれが是認する根拠だと、考えられてきた。」¹⁸⁾しかし、「1ギニーの喪失にたいして、このギニーが1000ギニーの一部であるという理由で、そしてわれわれはその全金額の喪失に関心をもつべきだという理由で、われわれが関心をもつのでない」¹⁹⁾のと同様に、一個人への侵害にたいするわれわれの関心は、社会全体への関心からでてくるのではない。個人への関心が全体への関心に先行する。ときには後者から処罰が要求されることもある。見張り中にいねむりをした哨兵は、厳罰に処せられるであろう。しかしこうした処罰は、つねにきびしすぎると思われる²⁰⁾。

このように全体主義的な正義論を批判するスミスの正義論においては、その権力主義的性格は、よわまらざるをえない。この傾向は、もうひとつの方向から促進される。それは、自己規制である。各人は、自己のことに最大の関心を示す。しかしかれは、他人がついてこないこと、また、もっとも恐るべき感情である悔恨の情にとらわれることをしているの、自己の利益のために、正義の諸法を侵犯しようとはしない。このような性向が人間に与えられていることに、スミスは、自然のえいちをみる。「正義は、大建築の全体を支持する支柱である。もしそれが除去されるならば、人間社会の偉大で巨大な組織は、一瞬に崩壊して諸原子になるにちがいない。その組織は、この世でそれをうちたて、それを維持することが、そういってよければ自然の特別で愛情にみちた配慮であったように思われるも

18) T. M. S. p. 193. 水田訳, 137ページ。

19) 20) T. M. S. pp. 198-202. 水田訳, 139-142ページ。スミスのこの批判にかんしては、内田義彦, 『経済学の生誕』未来社, 1953年, 106-117ページをも参照せよ。

のである。だから、正義を守ることを強制するために、自然は人間の胸のなかに、その侵犯にともなう、処罰にあたいするという意識、相応的な処罰への恐怖を、人類の結合の偉大な保証として、うえつけておいたものであって、これが弱者を保護し、暴力をくじき、罪をこらしめることになるのである。」²¹⁾

すでに見たように、スミス道徳論の特徴は、道徳の超越的性格がよわくなっていることであった。道徳の一部としての正義の徳にも、以上のように、そうした特徴を見ることができる。正義の諸法の内容は、社会の一般的利害によってではなく、受難者の憤慨に規定されるのであり、さらに、人びとは、処罰にあたいするという意識²²⁾によって、内面からそれらを守るよう強制されているのである。これは、市民社会の優位にほかならない。すなわち、市民社会が正義の諸法を規定するのみならず、それらは、市民社会内部の相互規制によって守られるのである²³⁾。

では、国家権力の役割はなにか。スミスは正義の徳は力づくで強制されるという点で他の徳とことなるという。「けれども、もうひとつの徳性がある。それを守ることは、われわれ自身の意志の自由にまかされず、力づくで強制されてもよく、その侵犯は憤慨の、したがって処罰の、的となる。この徳性が正義であり、正義の侵犯は侵害である……人類は、不正によってなされた害への復讐のために使用される暴力には、ついていくし、是認をあたえるのだから、同じように、侵害を予防し払いのけるために、そして加害者がかれの隣人たちに害をあたえるのを抑制するために、使用される暴力には、かれらははるかによくついていくし、是認をあたえる。不正をもくろむ人物自身が、このことに気づいていて、その力が、かれが

21) T. M. S. pp. 190-191. 水田訳, 135ページ。

22) この意識は、国家権力による処罰のみへのおそれではない。同胞市民によって排斥されることへのおそれでもある。

23) したがって、スミス正義論は、経済学に帰着する。高島善哉『経済社会学の根本問題』1941年、を参照せよ。

侵害しようとする人物と他の人びとの双方によって、かれの犯罪遂行を妨害するためにであれ、かれがそれを遂行してしまったときはかれを処罰するためにであれ、最大の適宜性をもって、使用されるかもしれないと感じる。』²⁴⁾しかし、ここから、国家権力の役割をとくのは早計である。うえに見たように、スミスにおいては相互規制が重視されていたからである。さらに、この一節においても、後半部分には、加害者の側における抑制がとかれている。また、復讐とか予防のための暴力の行使者が、国家権力であるとは、明示的にのべられていないし、後半では受難者自身がその力の行使者になりうることを示している。市民社会に優位を見たスミスにおいては、国家権力の問題にたいする関心は減少している。

たしかにスミスは、実定法の諸体系に言及したところで、ロックにいた論法で、国家権力についてのべている。「正義の侵犯は、人びとが相互にけっして甘受しようとししないものであるから、公共的為政者は、この徳性の実践を強制するために、公共社会の力を使用する必要にせまられる。この予防手段なしには、市民社会は、各人が、侵害されたと自分が想像するたびに自分の手で復讐するという、流血と無秩序の場面になったであろう。各人が自分にたいして裁判をおこなうことにともなったであろう混乱を、防止するために、為政者は、とにかくかなりの権威を獲得したすべての統治において、すべての人にたいして正義をおこなうことをひきうけ、侵害についてのすべての不平を審理することと償うことを、約束する。』²⁵⁾しかしこの一節で問題となっているのは、実定法の諸体系であって、国家権力そのものではない。この引用文の少しあとで、つぎのようにいうとき、スミスは、国家権力の問題を実定法の問題に矮小化しているのである。「ときには、国家の基本構造とよばれるものすなわち、政府の利害関心が、ときには政府を圧政化している特定諸階層の人びとの利害関心が、

24) *T. M. S.* pp. 173-174. 水田訳, 125ページ。

25) *T. M. S.* pp. 547-548. 水田訳. 433ページ。

その国の実定法を、自然的正義があらかじめきめたであろうものから、逸脱させる。』²⁶⁾市民社会に優位をみたスミスの関心は国家権力論から法学、経済学へと移行していたのである。

II

前節では、スミスの国家権力論は、正義論との関連でのみ考察された。しかしスミスは、正義論とはべつところで、正義論で展開された権力論と矛盾するように思われる権力論を展開している。

スミスは、まず、人びとのつぎのような性向に注目する。悲哀にたいする人びとの同感、歓喜にたいするそれよりもよくしられている。後者については、議論によって証明する必要があると考えられたが、前者はだれにもそうした必要を感じられなかったほど明白である。しかし、観察者と当事者との感情のへだたりは、歓喜においてより悲哀においてのほうが大きい。人びとは、同席者のまえで、笑うことよりも泣くことを恥じる。なぜか。後者のばあい、観察者の完全な同感をえがたいからである。こうした人間の性向のために歓喜の状態にある権力者、富者は、人びとの完全な同感をえる。他方、乞食は、そうした同感をえがたい²⁷⁾。

スミスがこうした人類の性向のうちに、貧欲、野心の起源を見ていたことは、これまでの研究によって十分あきらかにされている²⁸⁾。しかしスミスは、この傾向から経済社会の動因だけでなく、諸身分の区別と社会の秩序を説明しているのである²⁹⁾。

諸身分の性格はつぎのようにえがかれる。まず上流の身分の人において

26) T. M. S. p. 548. 水田訳, 434ページ。

27) Cf. T. M. S. pt. I. sect. 4. chap. 1.

28) 内田義彦, 前提書, 117-126ページ。

29) この点については、山崎怜氏と和田重司氏の言及がある。以下、両氏のもっともあたらしい論文をあげておく。山崎怜, 「アダム・スミスと国家」大河内一男編『国富論研究』3巻1972年, 和田重司, 「『国富論』における「市民社会」」『社会思想』3巻1号, 1973年。

は、「かれのすべてのことば、かれのすべての動作が、注目されるので、かれは通常のふるまいのあらゆる事情にたいする慣習的な顧慮をおぼえるのであり、それらの小さな義務のすべてを、もっとも正確な適宜性をもって遂行することを学びとるのである。……かれの様子、かれの身ぶり、かれのふるまいは、すべて、かれより低い地位に生まれた人びとが、ほとんど一度も到達しえないほどの、かれ自身の優越性についての優雅でおくゆかしい感覚を、目だたせている。」³⁰⁾しかしこのように主として身だしなみが問題となる上流身分の人において、忍耐、勤勉、剛毅、思考の集中とかいった諸徳性にめぐりあうことはほとんどない。他方、低い身分の人は、上流の身分の人のように、人びとの注目をうけない。したがって、「もっとも完全な謙虚とかぎりのなさが、その同席者にたいしてはらうべき尊敬と矛盾しないかぎりの無頓着とむすびついたものが一私人のふるまいの主要な諸特徴であるべきである。」³¹⁾また、低い身分の人は、「自分の肉体の労働と精神の活動のほかには、資金をもたない。」³²⁾かれは、それらによってしか自己を目だたすことはできない。肉体的精神的諸能力は、こうした人において函養される。そこで社会における実際の力は、無能で公共の仕事を処理できない上流の身分の手から、中・下層身分の手にうつることになる。「すべての政府において、諸王国においてさえ、一般に最高の職務を手くにぎるのは、また行政のすべての詳細を動かすのは、生活上の中流および下流の身分で教育され、自分自身の勤勉と能力によって頭角をあらわしてきた人びとであって、かれらは、生まれながら自分たちの上長であるすべての人びとの、嫉妬心に苦しめられ、復讐心に敵対されるとはいえ、そうなのである。上流の人びとはかれにたいして、最初は輕蔑をもって、やがては羨望をもって見たのちに、ついに、自分たちにたいして人類の残りの部分がそう行動してもらいたいと望んでいるのと同じの、情ないいや

30) T. M. S. pp. 117-118. 水田訳, 78ページ。

31) 32) T. M. S. pp. 120-121. 水田訳, 79-80ページ。

しさをもって、屈従することに満足するのである。』³³⁾

しかしスミスは、このように中・下層身分を高く評価するとはいえ、身分の区別を否定しようとはしない。身分の区別を生み出す人びとの性向のうえに社会秩序がきずかれるといわれる。「富裕な人びとおよび勢力ある人びとの、すべての情念についていくという、人類のこの性向のうえに、諸身分の区別と社会の秩序とが、きずかれるのである。われわれより上長の人びとにたいする。われわれのへつらいは、かれらの好意によってえられる諸思恵への、なにかひそかな期待から生じるよりも、かれらの境遇の有利さにたいするわれわれの感嘆から生じることのほうが、しばしばである。……かれらがそのように完全にちかい幸福の体系を達成するのを、われわれは援助したがるのだし、そして、われわれは、かれらにありがたく思われるという、虚栄または名誉のほかには、なんの報償もなしに、かれら自身のためにかれらに奉仕したいと望むのである。また、かれらの意向をわれわれが尊重するのは、そのような従順さの効用および、そういう従順によってもっともよくささえられる社会秩序への、顧慮に、主としてあるいはまったく、もとづくのではない。われわれがかれらに反対することを、社会秩序が求めているように見えるばあいでも、われわれはなかなか、自分たちをその気にならせることができないのである。』³⁴⁾こうした人類の性向のために、王の悲運は、人類の大きな関心をひく。「自分の君主の命をねらって陰謀を企てる反逆者は、他のどんな謀殺者にもまさる大悪人だと、考えられている。諸内乱のなかで流された罪のない血の、すべてがひきおこした義憤は、チャールズ一世の死がひきおこした義憤におよばなかった。……チャールズ一世の死が、その王室の復活をもたらした。ジェームズ二世が舟に乗って逃走する途中で、民衆に捕えられたときの、かれにたいする同情が、ほとんど革命を阻止しかけたのだし、その進行をまえ

33) T. M. S. pp. 123-124. 水田訳, 81ページ。

34) T. M. S. pp. 114-115. 水田訳, 76ページ。

よりもおそくしたのである。』³⁵⁾これに反して、人びとは成あがり者を心よくうけいれない。かれは、以前所属していた階層の自尊心のみならず新しく所属することになった階層の自尊心をもきずつける³⁶⁾。

すなわちスミスは、人間を、自分より上のものには、自己の利害とか社会の利害をはなれて、服従するものだとするのである。そこで人間のこのような性向を無視した学説は、理性と哲学の学説として厳しく批判されることになった。「国王たちは人民の召使であって、公共の便宜の求めるままに、服従され抵抗され廃位され処罰されるべきものだ、ということは、理性と哲学の学説である。しかしそれは自然の学説ではない。自然はわれわれに、かれら自身のためにかれらにたいして従順であるように、……教えるのである。』³⁷⁾

以上、スミスの身分論について見てきたがここで展開されていることは、第1節で検討したかれの正義論と矛盾しないか。スミスのいう正義の目的は、生命、財産、契約を守ることであった。そこには、反逆阻止とか身分の保護はふくまれていない。表面的には、矛盾するように思われる。しかし、以下に検討するごとく、本質的には矛盾しないのである。

まず第1に、正義論、身分論ともに、同感の原理によって展開されていたことに注意しなければならない。方法的には、両者は同一である。第2に、正義論をささえていた憤慨が、身分論をもささえることになるということである。スミスは、第1部第3篇「適宜性と両立しうる、さまざまな情念のていどについて」というところで、冷静で中立的な観察者がついていける憤慨についてつぎのようにいう。「度量が大きいこと、あるいは社会におけるわれわれ自身の身分と尊厳を維持しようという顧慮は、この不快な情念の諸表現を高貴なものとなしうる、唯一の動機である。』³⁸⁾身分の

35) T. M. S. pp. 114-117. 水田訳, 75-76ページ。

36) Cf T. M. S. pp. 85-86. 水田訳, 57-58ページ。

37) T. M. S. p. 115. 水田訳, 76ページ。

侵害にたいする憤慨が、中立的な観察者の同感を与える、というのである。しかし、受難者の憤慨に究極の根拠をもつ正義の諸法の目的に、身分の保護は入れられていない。そこで第3に考えられることは、正義論、身分論はともに社会秩序の問題をあつかうものではあるが、両者はそれをちがった角度から見ているのではないか、ということである。ここで、前に引用した正義の諸法にかんする一節のつぎの部分に注目すべきである。「したがって、謀殺は、人類の目から見ても、それを犯した人の目から見てもともに、諸個人だけに作用するすべての犯罪のなかで、もっともひどいものである。」³⁹⁾すなわちスミスは神聖な正義の諸法といったとき、諸個人のみに関係する問題をあつかっていたのである。反逆罪がそれらの目的のなかにあげられていないとはいえ、それが厳しく排斥されている点では、身分論と同様である。それは、結果となってあらわれなくとも意図だけで罰せられる唯一の犯罪なのである。

では、身分論にかせられた課題はなにか。個人に関係する問題が、正義論の目的であったとすれば、残された問題は、全体に関係する事柄である。身分論の課題は、社会秩序そのものである。現存秩序のよう護、これが、身分論の課題だったのである。理性と哲学の学説にたいする批判は、そのあらわれだったといえる。

しかしスミスのこの保守主義を権力主義的なものだと見てはならない。身分の区別は、上流身分の抑圧的な支配によってではなく、それに奉仕しようとする人びとの自然の性向によって維持されるのである。また、この保守主義を伝統的な身分社会のよう護と考えてはならない。身分の区別は、人間としてのちがいにもとづくのではなく、権力者とか富者の歓喜に同感しやすい人びとの性向にもとづくのである。上流身分の絶対的優位は

38) *T. M. S.* p. 79. 水田訳, 53ページ。

39) *T. M. S.* p. 184. 水田訳, 132ページ。

とかれていない。上に見たようにそれは無能なものとされている⁴⁰⁾。しかも、社会における実際の力の中・下層身分ににぎられているのである。

したがってここでも、市民社会の優位には変りはない。しかしスミスは、なぜ、無能で無益な上流身分にたいする反抗に反対したのか。実質的には中・下層身分によって支配されているこの社会において、今さら、上流身分に反抗する必要もなかろう。それは、社会の秩序を混乱におとし入れるだけだ。保守主義者スミスの真意は、おそらくこうしたところにあったと考えられる。この点は、『道徳感情論』第6版においてより明確になる。

III

『道徳感情論』は、第2版(1761年)と第6版(1790年)でかなりの修正と加筆がおこなわれた。第3版から第5版にかけては、第3版で「諸言語起源論」がつけくわえられた点、および第4版で、副題「あるいは、人びとが自然に、まずかれらの隣人たちの、そしてのちにかれら自身の、行動と性格にかんして判断するさいの、諸原理の分析のための一試論」が追加された点をのぞけば内容的にはおおきな変化はない。第2版での修正は、主として第3部に集中し、その検討は、本稿での課題でない。スミスの正義論、身分論との関係で重要な変化は第6版における改訂増補である。

第6版における改訂増補において、まず注目すべきことは、正義論にかんしては本質的な変更がなく、むしろ、徳としての正義のとりあつかいにおいては、後退さえ示している、ということである。この版で追加された、第6部「徳性の性格について」において、考察の対象となっているのは慎慮、慈愛と自己規制であって、正義の徳は独立した考察対象とされていない。スミスは、その第2篇「他の人びとの幸福に作用しうるかぎりで

40) スミスの権威の原理が、最終的には、富を根拠とすることによって、ブルジョア化されていたことを想起せよ。Adam Smith, *Lectures on justice, police, revenue and arms*, O. U. P. 1896. p. 10. 高島・水田訳『グラスゴウ大学講義』1947年, 99ページ。

の、個人の性格について」の序論で、自然法学の重要性を強調しつつも、つぎのようにいう。「われわれの隣人の幸福を、どんな法もかれを適切に保護しえないばあいにおいてさえ、どんな点についても害したり妨げたりしないという、神聖で宗教的な顧慮が、完全に罪がなくて正しい人間の性格を構成する。その性格は、注意の一定の繊細さにたったときは、それ自体としてつねに高度に尊敬すべきものであり、崇敬すべきものでさえあって、しかも、他のおおくの徳性、他の人びとのためを思うつよい感情、大きな人間愛と大きな慈愛を、ともなわないでいることは、かりにもほとんどありえないのである。それは、十分に理解される性格であり、なにも説明をつけくわえる必要がない。この篇では、わたくしはただ、第1に諸個人にたいして、第2に諸社会にたいして、われわれの善行を配分するために……自然が計画しておいたように思われる順序の、基礎の説明に努力するだけにしたい。」⁴¹⁾

正義の徳は、初版では、慈恵とともに第2部でとりあつかわれていた。しかし第6版第6部の他の人びとの幸福に作用する性格のところでは、慈恵のみに関心が集中し、正義については、十分あきらかなことで説明するまでもない、といわれるのである。もともと、正義の徳は、消極的なものであり、市民社会における人びとの相互規制のなかで実現されるものであった。その考察が、『グラスゴウ大学講義』をへて、『国富論』に結実する。したがって、『国富論』をかきおえたスミスが、第6版で追加された第6部で、正義を独立にとりあげなかったのは、理由がないことではない。

他方、身分論にはかなりの追加が見られる。まず、初版第1部第4篇第3章にあったストア哲学論が、前章および第7部学説史にまわされ、第3章として、道徳感情の腐敗の問題がとりあげられる⁴²⁾。その冒頭でつぎの

41) *T. M. S.* 6th, ed. 319-320. 水田訳, 451-452ページ。

42) タイトルはつぎのとおり。Of the corruption of our moral sentiments, which is occasioned by this disposition to admire the rich and the great and to despise or neglect persons of poor and mean condition.

ようにいう。「富裕な人びと、有力な人びとに感嘆し、ほとんど崇拜し、そして、貧乏でいやしい状態にある人びとを軽蔑し、すくなくとも無視するという、この性向は、諸身分の区別と社会の秩序を確立するのにも維持するのにも、ともに必要であるとはいえ、同時にわれわれの諸道德感情の腐敗の、大きな、そしてもっとも普遍的な、原因である。富と上流の地位とは、しばしば、英知と徳性とにのみふさわしい尊敬と感嘆とをもって、見つめられ、悪徳と愚行だけが固有の対象である軽蔑が、しばしば、きわめて不当に、貧困と弱さとにあたえられる、ということは、あらゆる時代の道德学者たちの、不満であった。」⁴³⁾

だが、スミスは、道德学者のこのような不満にたいして、初版で展開された身分論を撤回しない。それを、より強固に主張する。「自然は賢明に、諸身分の区別、すなわち社会の平和と秩序が目に見えず、しばしば不確実な知恵と徳性のちがいに依存するよりも、出生と財産の明白で触知できるちがいに依存するほうが、安全であろうと判断した。人間の大群集の、識別力のない目でも、まったく十分に、後者を知覚する、前者を識別しうるには、賢明な人びと、有徳な人びとのみごとな洞察力でも、ときどき困難をともしなう。」⁴⁴⁾すなわちここでは、身分と社会の秩序が出生、財産といった明白な区別にもとづくというのは、自然の摂理のあらわれだ、とまでいわれるのである。

では、人々のこの性向に起因する道德感情の腐敗という問題はどうなるのか。スミスは、階層のちがいに応じて、徳性の成立する可能性の度合いがちがう、ということに注目する。中・下層身分においては、徳への道と財産への道とが一致しているという。周知の言葉ではあるが、重要なので引用しておこう。「中流および下流の、生活上の地位においては、徳性への道と、財産への道、少なくともそういう地位にある人びとが、獲得するこ

43) T. M. S. 6th ed. p. 84. 水田訳, 95ページ。

44) T. M. S. 6th ed. p. 332. 水田訳, 460ページ。

とを期待しても妥当であるような財産への道は、幸福なことに、たいいていのばあいには、ほとんど同一である。すべての中流および下流の職業においては、真実で堅固な職業的諸能力が慎慮、正義、不動、節制の行動と結合すれば成功しそこなうことは、めったにありえない。……そのうえ、中流および下流の、生活上の地位にある人びとは、けっし法律をこえるに十分なほどえらくはありえない。……そのような人びとの成功はまた、ほとんどつねに、かれらの隣人と同輩との、好意と好評とに依存するし、かなり規則ただしい行動がなければ、それらは、めったにえられないのである。したがって、正直は最良の方策だという、むかしからのことわざは、このような境遇においては、ほとんどつねに完全な真理としてあてはまる。だから、このような境遇においては、われわれは一般に、かなりのていどの徳性があることを期待するのだし、社会の善良な道德にとって幸運にも、これらの境遇が、人類のうちのはるかに大きな部分のものなのである。』⁴⁵⁾これに反して、上流身分においては、「成功と昇進とは、理解力があり豊富な知識をもった同等者たちの評価にではなく、無知高慢で誇りの高い、上長者たちの、気まぐれでばかげた好意に、依存するので」⁴⁶⁾中・下層身分のようなわけにはいかない。そこでは、諸徳性はすたれ、へつらいと偽りがはびこるのである。

しかしスミスは、ここからただちに、道德感情の腐敗の原因を上流身分の存在にむすびつけない。かれは批判の目を、上流身分そのものにむけずに、上流身分に到達しようとする人びとにむけるのである。上流身分をまねようとする虚栄的な人びとは、自分の境遇を以前にもましてわるくする。また、そうした地位をえようとする野心ある人は、徳性への道を放棄する。「この羨望される境遇に到達するために、財産への志願者たちはあまりにもしばしば、徳性への道を放棄する。なぜなら、不幸なことに、一方に通じる道と他方に通じる道とは、ときどきまったく反対の方向にあるか

45) 46) T. M. S. 6th ed. pp. 86-87. 水田訳, 96-97ページ。

らである。だが、野心ある人は、……かれの将来の行動のかがやきが、かれがその高みに達するまでの諸段階の愚かさを、完全におおい隠し、あるいは目だたなくするであろう、と思うのである。多くの政府において、最高の地位への志願者たちは、法律をこえる。⁴⁷⁾かれらは、目的のために手段をえらばず、謀殺と暗殺、反乱と内乱といった犯罪をおかすのである。中・下層身分において徳性への道と財産への道とが一致する、という1節においても、注意ぶかく、「財産への道、少なくともそういう地位にある人びとが、獲得することを期待しても妥当であるような財産への道は」と限定がつけられていたことに留意しなければならない。その限度をふみこえると、もはや、徳性への道と一致しなくなるのである⁴⁸⁾。

そして野心ある人によっておこされる内乱こそ、対外戦争とともに、道徳感情をもっとも腐敗させるのである。スミスはいう。「2国民が衝突するとき、それぞれの市民は、かれの行動について諸外国民がいただくであろう諸感情を、ほとんど顧慮しない。かれの全野心は、かれ自身の同胞市民たちの明確な同意を獲得することにある。そして、かれらはすべて、かれ自身をわきたたせているのと同じの敵対的情念によってわきたっているのだ、かれは、かれらの敵を激怒させ機嫌を損じることによるほど、かれらを喜ばせることはけっしてないのである。偏愛的な観察者が手近にいて、中立的なそれは、ひじょうに遠くにいる。戦争と交渉においては、したがって、正義の諸法が守られることはひじょうにまれである。」⁴⁹⁾ また、「真実の、尊敬された、中立的な観察者は、したがって、どんなばあいにもまして、鬭争する諸党派の暴力と激怒のまっただなかにおいては、大きな距離を保っている。これらの諸党派にとっては、そういう観察者は、宇宙のなかのどこにも、ほとんど存在していないと、いっていいかもしれない。

47) T. M. S. 6th ed. pp. 88-89. 水田訳, 98-99。

48) スミスの野心については、拙稿、前掲論文および木崎喜代治「ルソーとスミス」『社会思想』3巻1号、1973年102-103ページを参照せよ。

49) T. M. S. 6th ed. pp. 217-218. 水田訳, 268ページ。

宇宙の偉大な裁判官にたいしてさえ、かれらは、自分たちのすべての偏見を帰属させるし、そしてしばしば、その神聖な存在を、かれら自身のあらゆる執念ぶかく無慈悲な情念によって、わきたっているかのようにみるのである。だから、道德感情を腐敗させるあらゆるもののうちで、分派と分派主義は、つねにとびぬけて最大であった。」⁵⁰⁾

前節でみたスミスの保守主義は、第6版においてこのように、野心家批判、内乱、戦争への反対として、より明確になってくる。このことと並行して、スミスの為政者像もより明確になる。それは、国家の基本構造とからまして展開される。

スミスは、国家の基本構造をつぎのように見る。「それぞれの独立国家は、おおくのちがった階層と社会に分割されていて、そのおのおのは、それ自身の特定の諸権力、諸特権、諸免除をもつ。……ある国家が、それを構成するさまざまな階層と社会にわけられている様式に、そして、それらのそれぞれの諸権力、諸特権、諸免除について なされてきた 特定の配分に、その特定の国家のいわゆる基本構造が依存する。」⁵¹⁾この国家の基本構造は、各階層の自己保存本能によって維持される。それはきわめてつよく、国家利益にすら従わない。しかしそれが、「革新の精神」を阻止し、「既成の均衡」を維持し、「全体の安定と永続」をもたらすのである。

このことを無視した体系の人は、批判される。初版では、体系への愛は、公共的情念をかきたてるものとして積極的に評価されていた。⁵²⁾ところが第6版で追加された部分でそれと反対の見解が展開されるのである。体系にとらわれた人は、社会の成員たちをチェス盤上の駒のようにあつかい、かれらがそれ自身の運動原理をもつことを考慮しない。すなわち、国家の基本構造の安定をもたらす各階層の自己保存本能をまったく無視する

50) T. M. S. 6th ed. pp, 219-220. 水田訳, 268-269ページ。

51) T. M. S. 6th ed. p. 338. 水田訳, 465ページ。

52) T. M. S. pp. 341-355. 水田訳, 281-284ページ。

のである。そして、「かれらはしばしば、国家基本構造をつくりなおし、統治体系をそのもっとも本質的な諸部分のいくつかにおいて変更することを、提案する。その統治体系のもとでは、大帝国の臣民たちが、数世紀にわたってずっと、おそらく、平和と安全保障と、栄光さえも、享受してきたのであった。』⁵³⁾こうした体系の人と対置された理想的な為政者像は、つぎのようなものである。「その公共精神がまったく人間愛と慈愛によって促進されている人は、既成の諸権力と諸特権を、個々人のものであっても尊重するであろうし、国家が分割されている大きな諸階層と諸社会のものであれば、なおさらであろう。かれが、それらのうちのどれかを、あるていど悪用されているものとみなすとしても、かれは、大きな暴力なしには絶滅しえないことがしばしばであるものを、抑制することで満足するであろう。かれが、理性と説得によって、人民のなかに根づいている諸偏見を、征服しえないときは、かれはそれらを力づくで屈服させようとはこころみない……かれは、かれの公共的諸調整を、できるかぎり、人民の確認された諸慣行と諸偏見に、順応させるであろうし、人民が服従したがるしない諸規制の欠如から生じうる諸不便を、できるかぎり匡正するであろう。……そして、最善の法体系を樹立しえないばあいには、人民が耐えうるかぎり最善のものを、樹立しようと努力するであろう。』⁵⁴⁾

この為政者像には、既成秩序尊重の立場がつよく打出されている。しかしここで、スミスの保守主義の性格が変質しているわけではない。一部特権身分のよう護など、けっして主張されていない。さらに、為政者の仕事が具体的にのべられていないことに注意すべきである。その仕事は、現状のよう護、なにか問題があるばあいにはできるだけ摩擦をおこさないように処理することぐらいである。ここでも前にみたのと同様に、社会の秩序形成の主導権は、国家権力の手から市民社会の側に移行しているのである。

53) *T. M. S.* 6th ed. p. 341. 水田訳, 467ページ。

54) *T. M. S.* 6th ed. p. 342. 水田訳, 467-468ページ。

しかしなぜスミスは、第6版の追加部分でこうした為政者を登場させねばならなかったか。正義のみならず身分の区別すら、社会における人びとの交渉をつうじて守られるとすれば、そうした為政者すら必要でない。スミスが、第6版で野心家を批判し、為政者に言及したのは、市民社会における相互規制だけでは不十分なことを感知したからである。ただしこのばあいにも、この相互規制からの秩序形成を軽視しているわけではない。その側面を尊重しつつ、そこからはみでる部分をおさえようとしているのである⁵⁵⁾。この為政者像が、マンダヴィルとかスチュアートのそれとことなることは明白である。かれらの見た為政者は、市民社会の秩序形成をたすけるために必要な存在であった⁵⁶⁾。かれらに反してスミスにおいては、市民社会の内部でおこなわれる秩序形成が重視されているのである。

——1973年7月25日——

55) この点については、拙稿、『『道徳感情論』における政治と経済』前掲を見よ。

56) マンダヴィルについては、田中敏弘『マンデヴィルの社会・経済思想』1966年を、スチュアートについては、小林昇『重商主義の経済理論』1952年および川島信義『ステュアート研究』1972年を参照せよ。